

外国語（英語）科の指導力を どう高めるか

戦略の要点

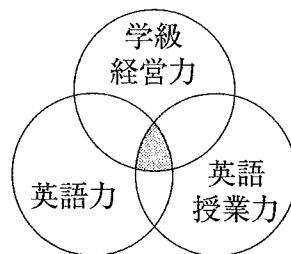
1. 英語教師には、学級経営力・英語力・英語授業力が求められる。
2. 英語力の加速度的な伸長には、海外研修が有効である。
3. 個人研修で到達目標を設定することが必要である。

1. 指導力の3つの構成要素を知る

英語教師の持つべき資質・能力には、「学級経営力」以外に英語教員に特化された「英語力」と「英語授業（教授）力」がある（石田, 2004参照）。この3つの力を兼ね備えている、つまり、下図の3つの円の重なりを持つのが理想的な英語教師である。なかには、さまざまな重なりを持ったり、円の大きさが異なったり、あるいは、校種や学校などによって、いずれかの力が、より大きく求められることがある。

「学級経営力」はすべての教師に求められるものであり、指導力のある教師といった場合、生徒などとの信頼関係を築くことを前提とする、この力がきわめて大切である。次に、「英語力」は、いわゆる4技能の能力を指し、たとえば、ACTFLやTOEFLなどの外部テストでも測定される、英語を理解したり使用したりできる能力である。端的に言えば、場面に応じて、正確かつ適切に対応できる英語によるコミュニケーション能力と考えられる。これに対して、「英語授業力」は英語の指導力であり、授業にかかわる、教材選択・作成、指導案作成、授業内容の配列・構成や具体的な指導方法やフィードバックなどの評価を含むものと、授業内容を支える英語教育学に関する理論的な知識や教養などが含まれる。これらの「学級経営力」「英語力」「英語授業力」のいずれも欠くことはできず、自己研鑽により常にこれらを高めることが英語教師には求められる。これらを通して、英語によるコ

図 英語教員に求められる素質・能力



ミュニケーションができる生徒を育成することが英語教師の使命である。

本稿では、すべての教育活動を円滑に行うために必須の「学級経営力」は教師としての基本として捉え、主に、外国語（英語）科の教科指導にかかわる「英語力」と「英語授業力」に限定して議論していく。

2. 研修を目的別に考える

教師の英語力が問われている。対象とした英語教師の層が定かではなく、統計上の信頼度に疑問は残るが、公立学校の英語教師、約3万9,000人のうち、英検準1級以上取得者は、中学校 10.1%，高等学校 19.6%，TOEFL 550点以上は、中学校 4.8%，高等学校 10.7%，TOEIC 730点以上は、中学校 8.3%，高等学校 16.3%という数値が出ている。「英語教師の研修」という見出しで引用されており、日本の英語教師の英語力の低さを印象づけている（「読売新聞」2005年9月3日）。

一方、文部科学省は、平成20年度を目標として、英語教育の改善の目標や方向性を明らかにし、「英語が使える日本人」の育成のための行動計画を出し、平成15年度から5ヵ年計画で、都道府県、あるいは、市町村単位で目標を定めて中学校・高等学校6万人の英語教員研修が行われている。3年目に入るこの研修は、原則として、すべて英語で行われ、教師の英語力や授業力向上が目的とされている。英語による授業に慣れるだけでなく、4技能の効果的な指導法やディベートのテクニックの習得、模擬授業による受講者同士の授業方法についての学び合いなど指導技術の向上を目指すプログラムが組まれている。しかし、この研修は1週間程度の短期間のものであり、授業力向上は期待できるが、英語力を格段に伸長することには、英語圏でまとった時間身を置くことが必要である。

3. 英語力の伸長は海外研修で求める

教師の指導力を高めるには、英語力と英語授業力の両方を高める必要があることには異論はないはずである。問題は、どこで、それらを高めるのかである。一部に共通部分もあるが、両者は異なる研修で高められるべきである。

英語力を高めるためには、英語圏の語学学校や大学などに入行って行う「海外研修」が最も効率的かつ効果的である。しかし、単に海外に行けばよいというのではなく、海外に出る前に国内で、日頃、英語力増進のための種を蒔いておかねば、実を結ぶまでに一気に成長することはない。

海外研修で、英語のみが話される環境で生活することによって、言語が実

際に使われる場面やその雰囲気を感じ取ることは貴重な体験である。たとえば，“The highs are 80s and the lows are 70s.” という温度を伝える英語は、その環境に身を置かないとなかなか感じ取ることができないというようなことである。80s, 70sといった英語が表す温度は、日常的に華氏を使う生活のなかで自然と体で感じるものである。

英語が使われる環境を教師が知ることなく、しかも日本のように英語のインプットが少なく、生徒の英語学習に対する動機づけがあまりなされていない教室に、英語による授業や生徒同士でコミュニケーションを図る活動など、自然に英語を使う環境を取り込んだり、つくり出したりすることは容易ではないであろう。まず、教師自身の外国での体験談やさまざまなエピソードを、授業のなかで生徒に伝えることが大切である。そうすることで、英語環境での説得力のある現実感を教室にもたらし、疑似体験をさせることが可能となる（高島、2005）。外国での体験を教室に持ち込むことで、英語によるコミュニケーションが自然と生じる環境づくりとなる。

また、教師も、わからなければ ALT に直接尋ねるなどの姿勢を見せてることで、生徒には間接的に英語のインプットを与えていくことになる。このような雰囲気のなかで英語を話そうとする態度が自然と身についていくのである。

海外で英語を使った経験があると、教科書等で扱われている場面や表現などについて、自信を持って指導ができる。また、同じような場面であっても、アメリカとイギリスとでは異なった表現が使われることがあることや、辞書から得られる訳と実際に使われるニュアンスには違いがあるなど、体験に基づいた知識を指導に活かすこともできる。さらに、どのようなことは生徒の知識として留めるだけでよいのか、また、発展的な活動として取り入れ、実際に運用できるまでに能力を伸長させなくてはならないことは何かなどを判断する際にも、このような経験が役立つと考えられる。

加速度的に英語力につけるには、10週間（3ヵ月程度）の海外研修が必要と思われるが、このような機会を得ることは、現状では容易ではない。国内における個人研修を考えていくことがより現実的である。そこで、まず、自分の弱点がどこにあるのかを見極めて、向上を目指すのである。

4. 個人研修で到達目標を設定する

前項で、海外研修が英語力の加速度的な伸長に有効であると述べた。日本にいても努力によってこれに似通った環境をつくることは不可能ではないが、

至難の業である。そこで、実行可能となる目標を立て、それを日課にすることで英語に触れる機会を増やすことができる。

個人で行うことができる身近な例として、国内の英字新聞 *Daily Yomiuri* の利用が考えられる。しかし、日々忙殺されている教師には、これを毎日読むことは困難である。そこで、『読売新聞』の夕刊であれば、あるキーワード（たとえば、good faith：誠意・正直）が訳語と共に提示され、記事の一部が50語程度で和訳と共に与えられているためそれほど苦もなく読むことができる。あるいは、『ニュースウイーク日本版』の Office E-mail (時には Office Talk) 欄では、"Something urgent has come up." (2005-09-05) という表現が紹介されており、日本語訳（緊急の用事がはいってしました）と共に、この英文の使い方が60語程度で説明されている。隣のページには、*Newsweek* 誌からのビジネスに関する100語程度の英文が、ほぼすべての語句に訳がつけられており、構文さえわかれば容易に読めるような仕組みとなっている。日本語中心の生活のなかに、わずかに英語を忍び込ませることで、日頃の英語のインプット不足を解消すると共に、英語力を維持することができる。また、時間のあるときに、CNN や BBC などのヘッドライン・ニュースを観るなどして海外研修に備えておくことが、英語力をより高めるための土壌となる。このように、英語力に関しては、毎日、1語ずつでも英語に触れ、短い英文を継続して読んでおくことが大切である。この努力が土台となり、英語のみの世界に身を置く海外留学の機会に、一気に加速度がついたように英語力が伸びることは確実である。

読むことと書くことに関しては、インターネットを利用する方法がある。自分の興味のある分野の情報を英語で読んだり、英文メールでやり取りをしたりするなどの作業は、研修という意識がないにもかかわらず、力をつけることができる。勉強するというスタンスではなく、情報を得る、伝えたい内容を英語にするという経験が、結果的に、英語が使える力となるのである。このように実際の言語使用により、英語力をつけることの重要性は4技能のいずれにも共通する。ただ、インターネット上で読んだり書いたりすることは、読みの正確さを問われたり、エッセイの添削を受けたり、コメントをもらうこととは異なり、正確さや適切さの向上を狙う学習として十分とは言えない。

また、これは英語に限ったことではないが、話を聞くときには、質問する姿勢で聞く、また、読むときには、何かコメントができるように読むという

2章 各教科・総合的な学習の時間・道徳の指導力の向上

目標を持つことも大切である。質問やコメントができるということは、ある程度内容を理解していることが前提である。このような proactive な行動、つまり、何らかの負荷をかけることで、読んだり聞いたりすることが知識として残る可能性が高いと考えられる。

いかなる方法であっても、英語力の自己研修については、自分に必要であると思われる技能について、成果を判断できるよう、また、意欲的かつ継続的に取り組むことができるよう、検定試験の級やスコアの目標設定することが有効である。

5. 英語教師力をつける

本稿では、英語教師の指導力の構成要素とその伸長方法について述べてきた。「英語力」については、英語をうまく話そうとするのではなく、より深い意思疎通のためには、どのような英語を話すとよいかを考える視点が大切である。書く場合には、正確な英語も要求されるが、話す場合には、英語の正確さよりも内容の伝達を優先させるという視点が、今後の日本の英語教育の一つの方向性として考慮されるべきであると思われる。

一方、「英語授業力」に関しては、「英語」という修飾語がつく限り、英語力の向上のために日々努力することは大切であるが、教師に「英語力」があるからと言って、即座に「授業力」につながるわけではない。つまり、教師の「英語力」と生徒にコミュニケーション能力をつけさせる「結果」を出す授業ができることとは、必ずしも正比例するとは限らない。英語力があっても、生徒の実態を無視すると、反比例することも考えられる。授業力は英語力と切り離して考え、指導法や教材研究など指導と評価の一体化のための研鑽は独自で行っていく必要がある。

英語力と英語授業力は自己研修によって、学級経営力は教師と生徒とのさまざまなコミュニケーションを通して形成される。これらが三位一体となり、さまざまな状況に対処できる「(英語) 教師力」となる。この総合的な力(図の3つの円の重なり)の向上が一層強く求められる。

《参考文献》

- (1) 石田雅近「英語教員が備えておくべき英語力」『英語展望』英語教育協議会、2004年、10~17頁。
- (2) 高島英幸 編著『文法項目別 英語のタスク活動とタスク — 34の実践と評価』大修館書店、2005年。

(東京外国語大学教授 高島英幸)

教職研修総合特集

わが校の「**教育力**」向上戦略 全3巻

【No.1】

学力を育てる “教師力”の向上

「確かな学力」を伸ばす指導力を高める

編集:工藤文三 国立教育政策研究所初等中等教育研究部長



教育開発研究所